

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 14 集

— 土気城跡・池和田城跡測量調査報告 —

平成 5 年度

財団法人 千葉県文化財センター

卷首図版



土氣酒井氏の墓（善勝寺）

中 央

寛永六月八日	常宗院日善位	□	寛永七年五月廿二日	遠量院日壽居士	酒井與左衛門	九月二日	日榮居士	窓院丁	寛永四卯丁
--------	--------	---	-----------	---------	--------	------	------	-----	-------

（富田彦兵衛）

酒井家旧家臣

（酒井重治）

土氣酒井最後の城主康治の子

没年58歳 旗本（約千石）

（酒井胤治）

重治の長男

没年28歳

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 14 集

— 土気城跡・池和田城跡測量調査報告 —

平成 5 年度

財団法人 千葉県文化財センター

序

千葉県には、中世から近世にかけて営まれた城館跡が、800か所あまり知られています。この城や館は、当時の実力者が、自分の治めていた地域の中心地や攻防の拠点となる要所に築いたことから、中世・近世の歴史を理解するためには欠くことのできない資料です。

首都圏に位置する本県では、大規模な宅地造成や交通網の整備、ゴルフ場をはじめとするレジャー施設の建設など、さまざまな開発がつぎつぎに進められ、城跡や貝塚、古墳などの埋蔵文化財を保護する上で大きな影響を及ぼしています。

このため、千葉県教育委員会では、昭和55年度から国の補助金を得て、重要遺跡発掘調査のひとつとして、県内の主な城館跡のうち、開発などの影響を受ける恐れのあるものについて、その範囲や施設のようすなど、今後の保護・活用のために資料を得ることを目的で、測量調査を実施してきました。

今年度は、千葉市から大網白里町にまたがる土気城跡と、市原市池和田城跡の測量調査を財団法人千葉県文化財センターへ委託して、実施しました。その結果、両城跡の範囲や、本丸、堀、土壘といった各施設の形や大きさ、配置などがわかり、当時の城のようすを理解するための重要な資料を得ることができました。

このたび、調査の成果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用の一助として、広く県民の方々に利用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、文化庁をはじめ、地元千葉市教育委員会、市原市教育委員会、大網白里町教育委員会、土地所有者の皆様方など、多くの方々のご協力に心から感謝申しあげます。

平成 6 年 3 月

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 森 成 吉

例　　言

1. 本書は次の2城跡の測量調査報告書である。

土気城跡 (遺跡コード 201-109) 千葉市緑区土気町826他
池和田城跡 (遺跡コード 219-066) 市原市池和田城廻280-1他
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受け、調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施したものである。
3. 調査および整理作業は調査研究部長高木博彦、同事業課長西山太郎の指導のもとに主任技師小高春雄が行った。
4. 本書の執筆は小高春雄が行った。
5. 地形測量は(株)京葉測量に委託し、平成5年11月、12月の2か月にわたって行った。
6. 本書に使用した地図の出典は図中に明記した。
7. 現地調査および本書の執筆にあたっては、城跡にかかる各町会の町長を中心とした地区の方々また千葉市及び市原市教育委員会には多大なご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。(敬称略)

土気城跡　土気町長　溝口恵秀、日本航空研修センター　田中雅幸、千葉市教育委員会文化課　菊地健一
池和田城跡　池和田町長　御園生敏、市原市教育委員会文化課　近藤敏、田所真
8. 本書の執筆にあたり、次の方々のご協力、ご教示を得ました。記して謝意を表します。

川戸彰、小川知昭、多賀大郎、林祥寺住職　家田泰丘、龍溪寺住職　渋谷昌道、光明寺住職　河辺堯周、善勝寺住職　溝口恵秀、湖口淳一、加藤修司、津田芳男、滝川恒昭、青沼道文、木内達彦、遠山成一 (敬称略・順不同)

目 次

序 文
例 言

千葉市土気城跡

本文目次

1. 位 置.....	1
2. 周辺の城跡と中世遺跡.....	2
3. 調査の概要.....	2
4. 城の構造.....	4
5. 出土遺物.....	11
6. 城の歴史.....	14
7. まとめ.....	21

挿図目次

第1図 土気城跡の位置.....	1
第2図 周辺の城跡と中世遺跡.....	3
第3図 土気城の縄張.....	5
第4図 実 城.....	6
第5図 金谷曲輪.....	6
第6図 二の曲輪.....	7
第7図 三の曲輪と馬出曲輪.....	8
第8図 井戸沢曲輪.....	9
第9図 幕末の土気町絵図.....	10
第10図 出土遺物.....	12
第11図 出土遺物.....	13
第12図 永禄七年国府台合戦前の房総.....	16
第13図 天正期の上総.....	18
第14図 御堂崎城.....	20

図版目次

図版 1 土気城跡周辺の航空写真
図版 2 昭和43年時の土気城跡

図版 3 土気城跡斜め航空写真・大網城跡付
近より見た土気城
図版 4 土気城跡三の曲輪近景・御経塚近景

市原市池和田城跡

大 目 次

本文目次

1. 位 置.....	25
2. 周辺の城跡と中世遺跡.....	26
3. 調査の概要.....	26
4. 城の構造.....	26
5. 城の歴史.....	31
6. まとめ.....	36

挿図目次

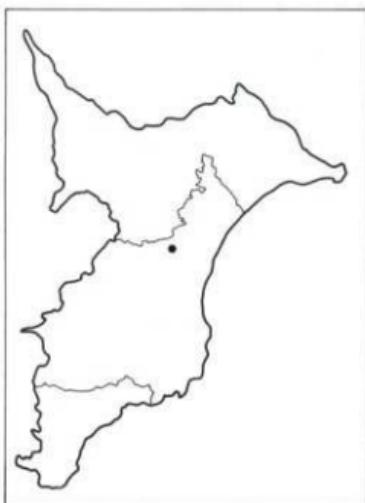
第15図 池和田城跡の位置.....	25
第16図 周辺の城跡と中世遺跡.....	27
第17図 池和田城の縄張.....	28
第18図 実 城.....	28
第19図 二の曲輪.....	29
第20図 三の曲輪	29
第21図 長南武田氏の勢力範囲.....	33
第22図 光明寺の石塔.....	35

図版目次

図版 5 池和田城跡周辺の航空写真.....
図版 6 池和田城跡斜め航空写真・遠景.....
図版 7 池和田城跡実城土塁・遠景.....

大 目 次

千葉市土気城跡



土気城跡の位置

1. 位置

土氣城跡は千葉市緑区土氣町826他に所在するが、一部は山武郡大網白里町金谷郷に含まれる。

土氣町は標高約90m前後の平坦な台地が一面に展開するが、大網白里町との境界付近は比高約40mほどの急崖をなし、はるかに太平洋を望むことができる。

土氣城はこの急崖を利用して築かれた城で、西側は鹿島川水系によって開析された比高10mたらずの浅い谷が南北にはしり、自然の障壁をかたちづくっている。

地質は関東ローム層とよばれる火山灰層によっておおわれているが、その下約10mたらずで砂層（下総層群成田層）、ついでシルト岩（上総層群笠森層）となる。



土氣城跡から見た大網方面



第1図 土氣城の位置 (○印) 国土地理院 1:25,000地形図 昭和55年時

2. 周辺の城跡と中世遺跡

- | | |
|----------|--|
| 1 御経塚 | 酒井氏墳墓跡と伝えられる。いわゆる十三塚か。 |
| 2 善勝寺 | 酒井氏菩提寺。境内墓地に塚群あり。 |
| 3 善勝寺跡 | いわゆる土氣城の出城跡。構造からみて16世紀中頃の城か。 |
| 4 小中城跡 | 伝承・記録ともないが、16世紀代の城。 |
| 5 大谷城跡 | 昭和56年から58年にわたって全域発掘調査済み。別名南河原坂城跡。村田川をさかのぼって土氣城にいたるルートを押える城か。調査結果から戦国末期の普請途上の城であることが判明。 |
| 6 鐘つき堂遺跡 | 昭和57年から60年にわたって発掘調査。南側斜面で中世集落を検出。 |
| 7 後台城跡 | 昭和58年から59年にわたって全城を発掘調査。15世紀後半（～16世紀）の小規模な山城。城域の全体に調査の手が入り、かつ、年代が特定できる好例。また、鐘つき堂遺跡の中世集落との関連性が指摘できる。 |
| 8 御堂崎城跡 | 昭和58年から59年にわたって全域発掘調査済み。台地上に中世の遺構・遺物がみられず、16世紀代の搔きあげの城か。 |
| 9 大椎城跡 | 遺存良好な戦国末期の山城。村田川上流域の要地に築かれた酒井氏の抱え城と推測される。 |
| 10 向台城跡 | 16世紀初めの城か。 |
| 11 板倉跡 | 塚ノ内の字名現存。15世紀代の館跡か。 |

3. 調査の概要

調査の方法は業者委託による地形測量と調査担当者による現地踏査および情報・資料収集である。そして、両者の成果のうえにたって城の概要または歴史をつかみ、今後の保護・活用に資することが調査の目的である。

業者委託による地形測量は空中写真測量によるが、樹木の繁茂する斜面および堀の一部については、現地で補足作業を行った。

現地踏査は現地の城跡において遺構の残存状況、またその範囲を把握するもので、現況を変更せずに旧状を類推する重要な作業である。そのためには、地権者からの聞き込みはもちろんのこと、広範囲の情報収集も必要となるが、限られた期間のもともちろん十分とはいえない。とはいえ、土氣城の場合、過去に大小4回の調査が行われており、その成果を何らかの形でとりいれることができた。この点はいずれも報告書が未完の現在、強調してよいと思われる。

資料収集については、土氣城が土氣酒井氏の根城であることを考えると、今回の報告で総てを網羅することは無理がある。一つの作業と位置づけたい。



第一軍管地方迅速測図 (1 : 20,000) 明治15年測量

第2図 周辺の城跡と中世遺跡 (○印土氣城)

4. 城の構造

土気城の復元研究は近年急速に進み、一部を除いてほぼその大枠はおさえられている（市川 1980、三島 1987）。これに今回北から東側急斜面に連なる小削平地群を加えた地形測量図とともに、遺構の現状を図示したのが第3図である。まずこの図にしたがって以下概説したい。なお、各曲輪の名称については近世の絵図（後掲）でもさまざまであり、今回はそれにとらわれず中世的呼称で示して（実城、二の曲輪、三の曲輪、井戸沢曲輪、馬出曲輪、金谷曲輪）いるが、その理由については各項を参照されたい。

土気城の全体を踏査して気づいたことであるが、二の曲輪外側の堀いわゆる二の堀（土気町鳩川家藏延宝七年「土気古城絵図」）の規模が現存する他の堀と比較して、幅・深さともに小さいことである。またどういうわけか、一部（井戸沢に至る屈曲部分）において不整合をなしている。これは、すでに二の曲輪内において検出されているやはり小規模な二条の堀（千葉市調査 1985、1993、なお、両者は規模、またその位置から同一とも思えないが、後者がこの二の堀と対応することは認めてよいであろう）とも符号するもので、一段階前の所産つまり時期差を示すと考えられよう。

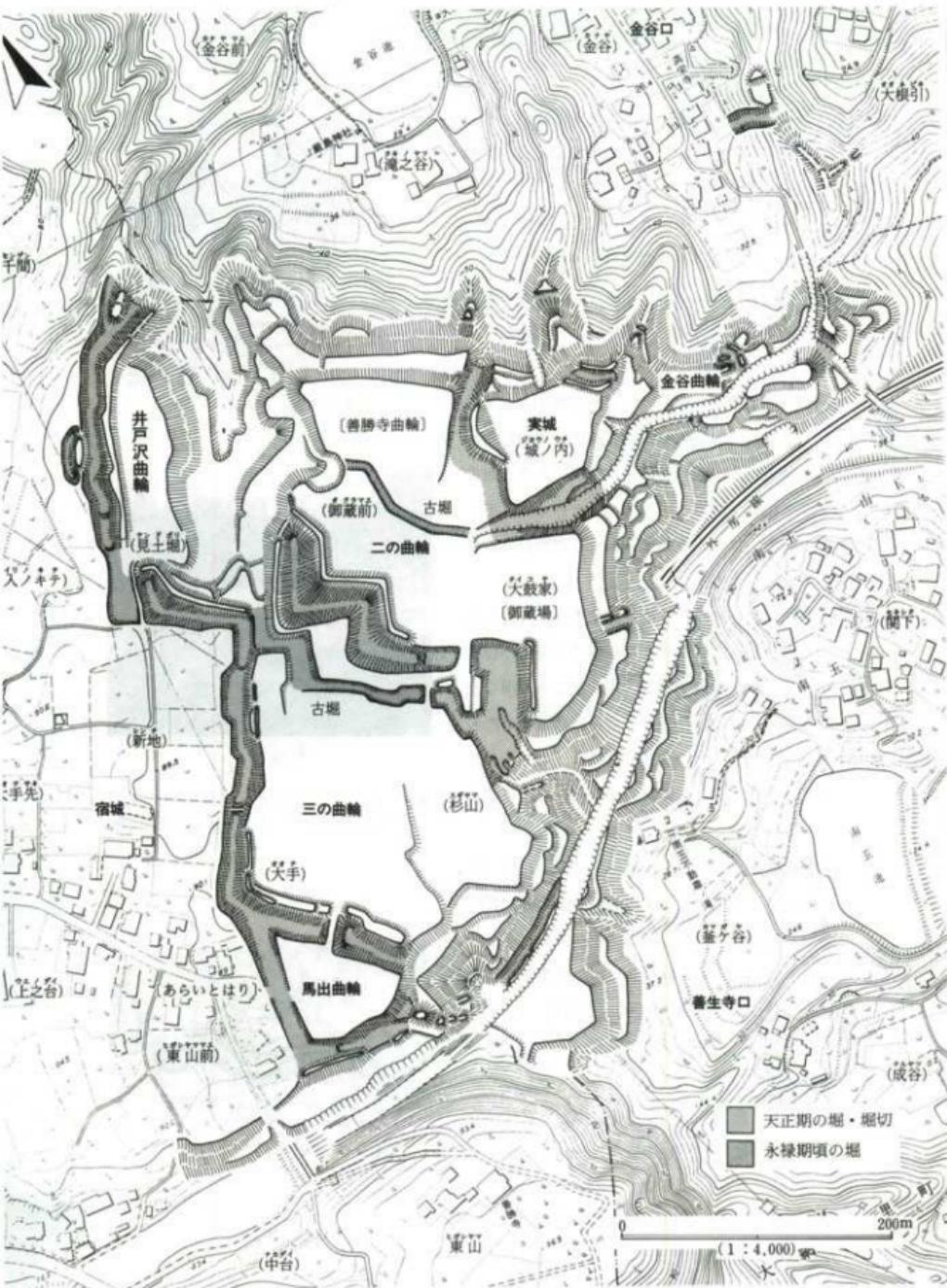
事実、遠山成一氏は現存する遺構を天正期ととらえたうえで、聞き取りまた周辺の踏査結果を加味し、永禄期の城域を二の曲輪の範囲内、記録にみえる宿城を現三の曲輪を含めたその外縁部に求めている。卓見というべきであろう（遠山 1989）。

これらを総合的に勘案すると、一段階前の城は実城・二の曲輪の北側および二の曲輪の南側に二大別できることになる。実城も恐らくその原形は存在したと思われる。現二の曲輪が明瞭に分割できること、井戸沢から南玉へ開口する小谷を結ぶ自然の谷を利用して外郭の堀が設定されていることが特徴といえよう。ではその時期はいつか、具体的な比定は難しいが、二の曲輪また三の曲輪で出土した遺物のほとんどが瀬戸・美濃編年でいう大窯のI期後半からII期終末に相当する事実からみて、16世紀代前半のある時期から永禄・元亀の間（1960年代）と推測される。

この台地続き外側、つまり、現三の曲輪からさらにその西側にかけて宿城があったと考えられる。その根拠としては、中世陶器片の散布（とりわけ字見土壙から新地）、また、遠山氏も指摘した通り、三の曲輪北西部鉄塔下における発掘調査の所見（厚い盛土下で確認された鉄砲弾、焼土の存在）等があげられる。永禄七年の宿城をめぐる戦闘は恐らく字入ノキテから現三の曲輪付近で行われた可能性が高いだろう。

なお、千葉市立郷土館には大正年間土気山中出土として戦国期の刀を展示している。16世紀初めの小田原刀工の銘を有するこの刀はあるいはこのとき以降、当地でたびたび行われた戦闘と関連するものであろうか。

それでは、具体的に現存する個々の遺構についてみてゆこう。



* 大網白里町 1:2,500都市計画図に今回の測量図を元にした縄張図(現況)を載せたもの

第3図 土氣城の縄張 ゴシックは曲輪名他。()は近・現代字名。()は近世水戻また絵図にみえる字名・名称

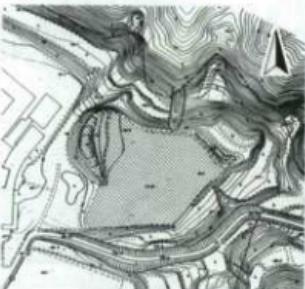
実城 実城は絵図（既述鳩川家絵図他）にみえる本丸に相当し、字城之内の地である。面積は現況で約5,500m²を測る。

西側の二の曲輪とは大規模な土塁・堀で画すが、どういうわけか北側半分のみ明瞭で南側は堀の痕跡がうかがえるにすぎない。聞き取り調査の結果、また、近世の諸絵図との照合でも現況と大差ない状況である。しかし、平成3年の調査では屈曲する堀のコーナーが検出されており、また、クラン坂には堀の続きと思われる窪みと落ち込みが観察される。中央で大きく屈曲してこのクラン坂に至っていたとみるべきであろう。虎口はこの屈曲部のあたりに設けられていたと思われる。

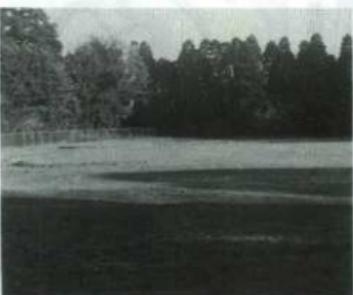
南側は堀を利用して後世掘割道を作ったと思われるが、屈曲の有無また規模等は開削の程度からして推測困難である。東北部に小規模な土塁と堀また腰曲輪を設け、支尾根は堀切で断ち切っている。なお、既述絵図には「酒井」と注記する神社が二の曲輪に対する高土塁上に認められる。

金谷曲輪 実城の東側尾根上にみられる二段の削平地を字名をとり金谷曲輪とよんだ。北側肩口に金谷に至る虎口施設が存在する。南玉側斜面には数段の腰曲輪があるが、急崖をなし比高差もある。面積は約1,500m²を測る。

大堀切をなす現金谷また南玉へ下る三叉路が曲輪の東限つまり土気城の東を画するものと思われるが、南玉側へ伸びる尾根小丘上には明瞭な階段状の削平地群が認められる。大規模な堀切のないことから、第3図中に図示しなかったが、遺構の可能性を捨て去るものではない。発掘調査による検証が期待される。



第4図 実城 (1:4,000)



実城現況

▲土塁下から東側を望む。後方は比高約60mにおよぶ崖となり、左側に土塁と空堀が並列する。



第5図 金谷曲輪 (1:4,000)

二の曲輪 既述絵図また近世の記録にみえる二ノ丸また善勝寺曲輪に該当するが、東側（現テニスコート場）一帯は御藏場（御藏之内）ともいわれる。

面積約27,000m²ほどを測り、計4か所にわたって屈曲する大規模な堀によって南西台地と画される。土塁はこの堀に沿って高土塁がみられるが、中央東寄りの虎口周囲は欠けている。隣接する井戸沢および南玉方面には階段状の腰曲輪が連続する。

過去に行われた四回の発掘調査のうち、三回がこの二の曲輪しかも日本航空研修センターの建物およびその周囲に集中している。いづれも報告書が未刊ながら、実城寄りに建物跡、井戸沢寄りに土壤基、地下式壇等が検出されているが、これは地形条件つまり平坦面と緩斜面の差が反映されたものと考えられる。なお、ここにかかる三十番神があった。

曲輪内を東西にはしる古い堀の存在についてはすでに述べたが、ここはかかる井戸沢からクラン坂また南玉方面に抜ける道の跡でもあり、以前は段差があってしかも適当に曲がっていたという（大正二年に地元の勝山豊七氏が発行した『土氣古域再興伝来記』所載の写真でもそれはうかがえる）。恐らくこの堀は新堀を掘った後も意識的に埋められることができなかつたのである。この点は二の曲輪外側の堀と符号するものといえる。

なお、この堀と実城との関係、つまり、一段階前の実城・二の曲輪のあり方については不明である。

御藏場と三の曲輪の間の堀跡を下ると南玉不動尊へ通ずる古道が山際に沿ってみられる。



第6図 二の曲輪 (1:4,000)



二の曲輪南西の堀

▲この堀は絵図（鳩川家絵図）に一ノホリ、長七拾五間また武拾五間（計百間）、横六間、深五丈（一部参丈）と記されているもので、城内では井戸沢曲輪の堀と並んで最も大規模な堀の一つである。

三の曲輪 二の曲輪の南側につらなる曲輪である。面積約29,000m²を測る。東側を杉山、西側を御蔵前といふ。現在、その西側一帯は字大手というが、近世の記録にはない字である。

宿に接する西側、南側を大規模な堀、土塁で画し、それぞれその中央に虎口を設けている。

この三の曲輪の堀は井戸沢曲輪の堀と同様、単に曲げるだけでなく、屏風折れに近い箇所（西側）や方形に突出させた箇所、また、場所によって広狭がある。土塁も意識的な広狭、段差や櫓台状施設の存在（南西コーナー）等、統じて技巧的で、築城技術の発達した段階の所産であることを示している。北西部に土塁がみられないのは、本来そこが自然の谷（井戸沢延長部）であったものを大規模に埋め立てた結果（昭和54年の発掘調査結果より）、その必要性がない程に外側との比高差が生じたゆえであろうか。

東側は小規模な腰曲輪が斜面に連続するが、土塁の延長線上にはあたかも窪地を意識したかのように削平地が取り巻いている。その先は急斜面を大きく掘り割った跡がみられるが、これはその延長の尾根を断ち切る意味があろうか。

また、池田字成谷から善勝寺北側の谷に至る旧道を意識したものかもしれない。この付近は太平洋戦争末期の防空壕や鉄道工事による地形の改変が認められる。

馬出曲輪 近世文書に「あらいとはり」とみえる。とはりは戸張のことであろう。その位置や形状から馬出曲輪と呼称した。面積約4,300m²ほどの三角形の曲輪である。

周囲を大規模な堀で画し、南側は土塁、腰曲輪が併設される。西側は後世の改変が顕著で、不明な箇所が多い。なお、その西側の堀を隔て



第7図 三の曲輪と馬出曲輪 (1:4,000)



三の曲輪虎口南側の土塁



三の曲輪西側の堀屈曲状況

た西北の場所は鍛冶屋敷といった。

井戸沢曲輪 字見土堀の地であるが、後方井戸沢との関連から井戸沢曲輪と呼称した。面積約9,000m²を測り、谷部を取り囲むように配置された細長い曲輪である。

西側、南側を深い堀で囲み、虎口は南西の屈曲部に設けている。堀は図にみるよう、まさに屏風折れとも形容すべきもので、加えて土塁の各屈曲点は若干高くまた幅広くとっている。

虎口は巧妙で、現在は一部土塁を壊し堀を埋めたために形が変わっているが、かつては土塁がさらには南にのびており、道の屈曲と相まって喰違い虎口状をなしていたと推測される。堀の外側にはいわゆる三日月堀がみられるが（内側は若干高い）、曲輪と連絡できる土橋状の施設も存在しない。馬出とは似て非なるものであろうか。この曲輪はすでに「水の手として重要で…後になってここを曲輪としたもの」と位置づけられている（三島 1987）。確かに、井戸沢は現在でも湧水がありこのような事情は確かに存在したに違いない。しかしながら、井戸沢そのものはこれといった要害でもなく、そこに三の曲輪からのびる堀を単に連結しただけではここが弱点となってしまう。この曲輪はこのような弱点を補う意味もある。本曲輪は土気城内で最も発達した繩張を有する地区の一つと総括できる。

宿城 戦国期文書にみえる「宿城」の遺構かと思われる土塁状の高まりが字大手先付近で認められるものの、それらは線として一定の区画を示さない（一応、第3図（入ノキテ）—（大手先）—（上之台）を結ぶラインが有力である）。なお、その西北部は入城手を意味する入ノキテの字名がみられることから、この付近に木戸で



第8図 井戸沢曲輪 (1:4,000)



井戸沢曲輪近景



井戸沢曲輪西側の堀

▲いわゆる屏風折れ状の屈曲を有するこの堀は本県の城郭に類をみない遺構である。

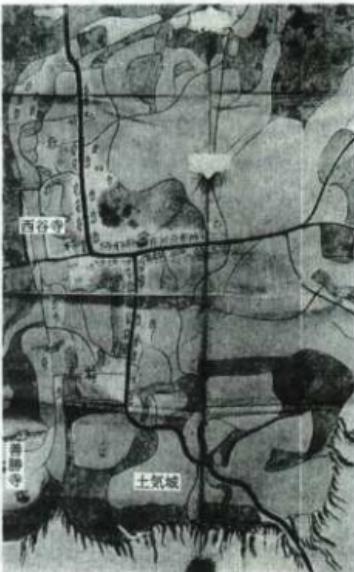
も設けていたのであろうか。いずれにしても、発掘調査による成果が期待される地区といえよう。

新宿 新しい堀（つまり天正期の遺構）に対応して新たに設けられた宿を宿城と対比して新宿と呼んだ。現在、西谷寺より西南を新宿（字）と呼ぶが、ここでは、三の曲輪また馬出曲輪西侧を含めてそう呼びたい。この新宿はいわば推測の域をでないが、現在の土気町の起源つまり街村の形成が近世初頭に既になされていたと思われること、また、その位置が馬出曲輪虎口の延長線上にある点も挙げられる。

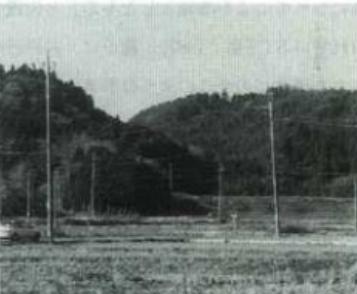
宅地の分布については、三の曲輪西側堀の外側また城内にも近世に屋敷地の存在が認められる。三の曲輪「わたりばし」また井戸沢曲輪の虎口の存在も考慮されよう。

あまり注意されることもないが、金谷口の谷部（満栄寺のある谷）も同じような状況が想定される。天満神社の前が地形的な区切りとなろう。戦国期石塔が多く散布する。

善生寺口 最後に永禄八年の酒井胤治書状に見える善生寺口にふれておきたい（善生寺は善勝寺の中世における呼称）。善生寺口とは善勝寺砦の前つまり近世の土氣往還道の峠付近とも考えられようが、三の曲輪の頂でふれた池田谷寺口遠景から馬出曲輪前面に至る中段の平場付近を有力な候補として推したい。金谷口同様東金酒井氏との古戦場である。



第9図 幕末の土気町絵図（文献No31より）



善生寺口遠景

▲中央やや左側の谷をさかのぼっていくと、現土気市街地に着く。左側山上は善勝寺である。

5. 出土遺物（第10、11図）

すでに述べているように、土氣城は過去に4回の発掘調査が行われているものの、いずれも報告書は未完であり、出土遺物はまったく公表されていない。ただし、昭和43年度調査分については、その遺物の一部は城内の日本航空研修センターに保管・展示、また、一部は茂原市郷土資料館に収蔵されている。ここで報告する遺物はこの両者のものであるが、これに城内の一石塔（37～41）を加えた。

1～4、8～10は陶器である。1は瀬戸・美濃のいわゆる端反皿で、底部内面には印花文（菊花）が押印される。釉薬は灰釉で、全面施釉される。2は瀬戸・美濃の三足つき香炉で、口縁から体部内外面に鉄釉を施す。3・4は瀬戸・美濃の天目茶碗である。削り出し輪高台で、体部は強く立ち上がり、口唇部は直立する。釉薬は鉄釉であるが、体部下方にはサビ釉がみられる。7は頸部から上を欠く完形の壺で、藏骨器として使用されたものであろう。胴部は横撫で調整され、底部近くは無調整である。肩部には自然釉の降灰がみられ、胎土は鼠色である。产地は不明。8は瀬戸・美濃の擂鉢口縁部片である。口縁端部が縁帯をなし、内面には10本一単位の櫛目がみられる。釉薬はサビ釉で、全面施釉する。9・10は常滑の壺または甕口縁部片である。いづれもその外面は紫褐色から紫色で、長石藻を含む。

5・6は瓦質の手焙りである。外面に菊花文の印花文様が押印される。

11～25はかわらけである。塊に近いタイプ（11～17）と皿に近いタイプ（18～25）に二大別される。いづれもロクロ撫で調整によるが、底部内面は指による再調整を施す（18は外面）。21、23が静止糸切りのほかは統て回転糸切りである。色調は黄褐色から桃褐色である。図示したもののほかに、底径をうかがえる個体が22個体あったが、それらについては表で示した。

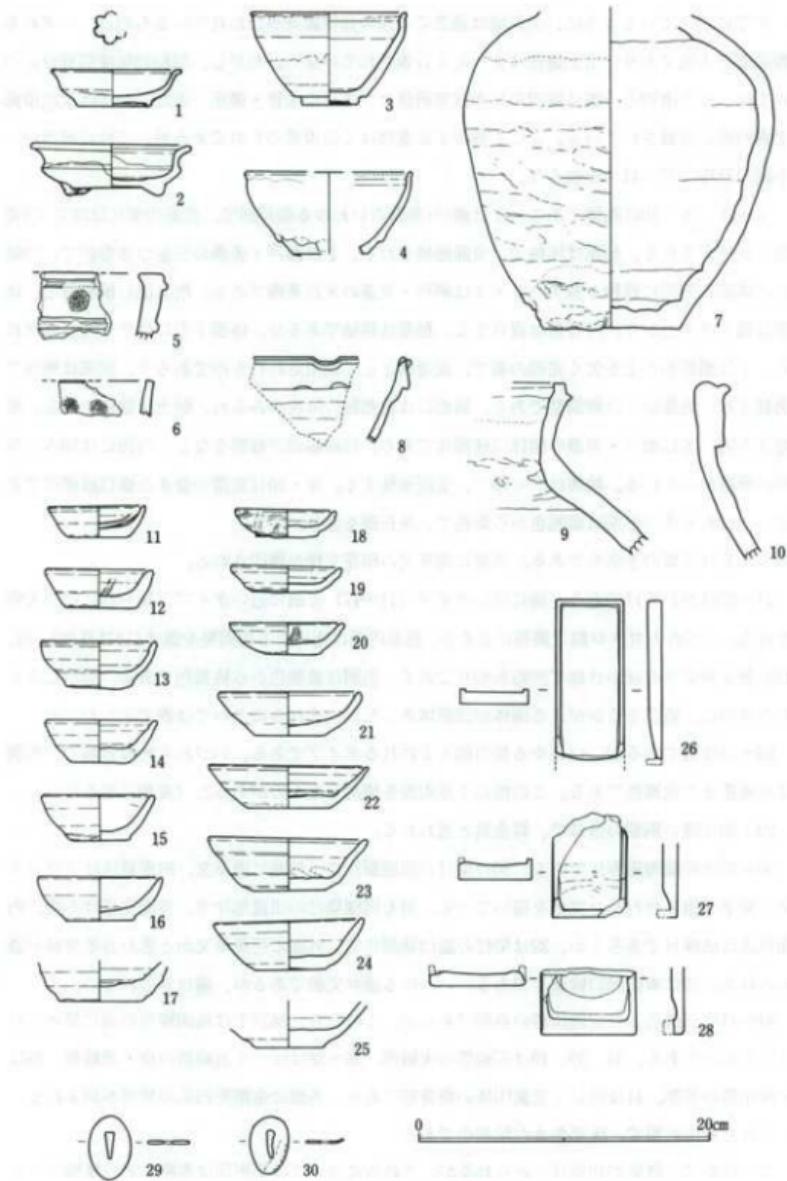
26～28は覗であるが、いわゆる長方覗とよばれるタイプである。いづれも粘板岩製で、色調は赤褐色または灰褐色である。この他に1点両面を使用したものがあった（実測に至らない）。

29・30は薄い銅製の金具で、鍍金具と思われる。

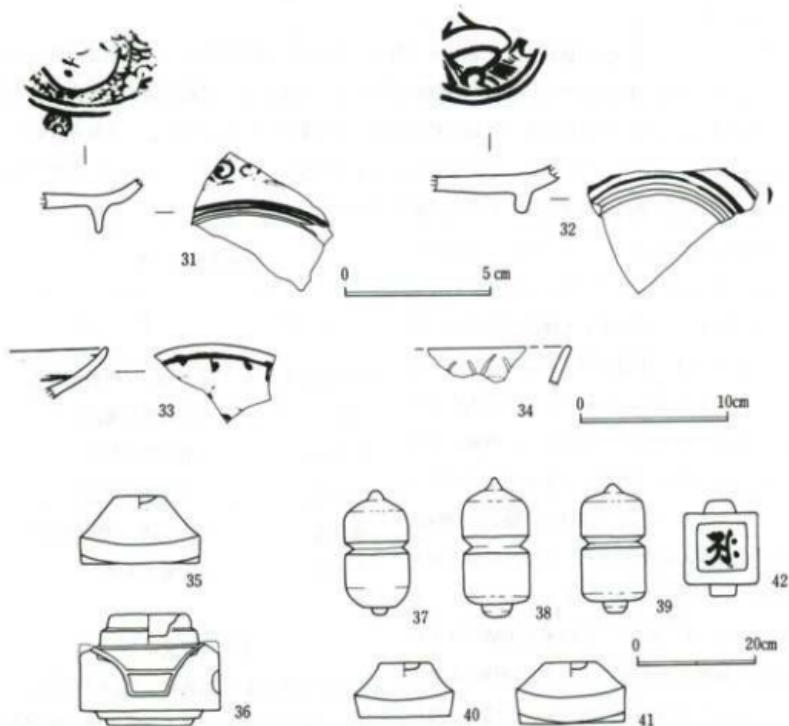
30～33は舶載陶磁器片である。30は染付の皿底部片で、外面に唐草文、内面見込にアラベスクと梵字を組み合わせた文様を描いている。31も同様染付の皿底部片で、外面文様は不明、内面見込は法螺貝であろうか。32は染付の皿口縁部片で、外面に芭蕉葉文かと思われる文様が認められる。33は青磁碗口縁部片である。いわゆる連弁文碗であるが、鏡はみられない。

34～41は五輪塔または宝篋印塔の各部であるが、このうち、36以下は馬頭観音の祠に集められていたものである。34、39、40は五輪塔の火輪部、36～38は同じく五輪塔の空・風輪部、35は宝篋印塔の笠部、41は同じく宝篋印塔の塔身部であり、各面に金剛界四仏の梵字が刻まれる。いづれも安山岩製で、灰黒色または紫褐色である。

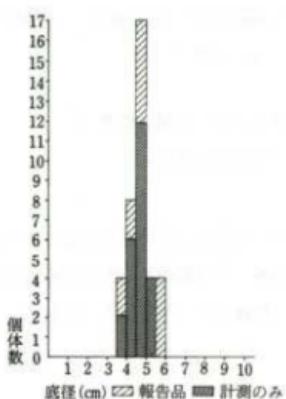
このほかに、錢貨が19点ほどみられるが、それらについては拓影図は省略しその種類のみを表に記載した。



第10図 出土遺物 (1/4)



第11図 出土遺物 31~33(1/2)、34(1/4)、35~41(1/10)



底径計測可能品を含めたかわらけの底径のあり方

土氣城昭和43年度出土銭貨(日航研修センター分)

種別	種類	枚数
中国唐朝銭	開元通宝	1
中国北宋銭	天禧通寶	1
	熙寧通寶	1
	元祐通寶	1
中国明朝銭	洪武通寶	1
	永樂通寶	9
不明		4

土氣城昭和43年度出土遺物収蔵別一覧(第10、11回)

日本航空研修センター	No.1, 2, 3~10, 12, 15, 16, 20, 21, 24, 26, 29, 30, 35, 36
茂原市郷土資料館	No.5, 6, 11, 13, 14, 17~19, 22, 23, 25, 27, 28, 31~34

6. 城の歴史

土氣城といえば酒井氏の居城としてあまりに有名であるが、酒井氏をもって土氣城の歴史がはじまるかどうかは明らかでない。『山武郡郷土史』をはじめとして、諸書にはその歴史が古代にさかのぼることや、酒井氏のまえに畠山氏の居たことを載せている。しかし、これらはいずれも伝説の域を出るものではなく、さらに言及する必要はないであろう。ここでは、現存する土氣城と酒井氏の関係をまず肯定したうえで話をすすめたい。

酒井氏の出自ははっきりしない。いちおうその本国また出自にふれているものとして右の文献をあげておくが、いずれも確証にかける。近年、川名登氏は『鎌倉大草子』にみられる「總州とけとうかね祖」の記載から、その出自は土岐氏一族の浜氏であり、山武郡の「堺郷」を後に領するにいたり、酒井氏を称するようになつたという説を呈示した(文献10)。確かに「堺郷」は中世の諸史料に散見され、その比定地を東金市丹尾付近(『地名辞書』ほか)とする考えもある。「淨光明寺文書」には、現東金市域に含まれる地名が複数みられることから、「堺郷」が東金市域、それも丘陵から台地の続く西部の一角を指す可能性は高いであろう。とはいえ、酒井氏と堺郷との関係は未だ確認されてはいないし、浜氏にしてもしかりである。結局、酒井氏の出自については将来の研究に待つところ大というべきである。

酒井氏初代つまり記録のうえにはっきりと酒井氏があらわれるのは定隆以降である。『本土寺過去帳』には、「清伝位酒井伯耆守 山辺ニテ」とあり、その受領名をしきくことができるが、残念なことに没年については不明である。ただし、土氣でも東金でもなく山辺と記していることは注目される。なぜなら、彼は通説では隠居後は東金に居たことになっているからである。この山辺(現大網から東金にかけての地)とは具体

酒井氏出自一覧

出 自	出 典
「遠江國の住人」	『土氣古城再興伝来記』
「遠州」	『土氣城双庵記』
「藤原氏」	『南總酒井伝記』
「新田氏」	『東金城明細記』
「藤原氏」	『断家譜』(寛永系図)
「千葉氏」	『千葉大系図』

中世堺郷文献

- * 「上總国北山野辺郡堺郷」(応永廿七年)
「淨光明寺文書」「千葉県史料 中世篇
県外文書」
- * 「上總州山辺郡堺郷」(明応九年)
「武藏国光明寺鰐口銘文」「千葉県史料
金石文篇二」

初代…酒井定隆 受領名伯耆守
(小太郎・清伝)

* 善生寺「改宗前の古什器」として、永正三年(1506)大檀那酒井小太郎定隆敬白と銘のある梵鐘があったという(文献8)。

的にどこを指すのか明らかでない。しかし、この点は土気城の起源を考えるうえで留意すべきである。

二代定治および三代玄治については不明な部分が多い。存在そのものも疑ってみる必要がある。同じく『本土寺過去帳』には「隆賢位土氣酒井伯耆守殿永正十七年庚辰四月」とある。四代胤治が天正の初め頃まで当主としてあったことからすると、この人物は二代定治としてよいであろうか。注目すべきはここで明確に土氣酒井とみられることである。恐らく酒井氏が土氣城に拠ったか築城したのもこの永正十七年（1520）を大きくさかのぼらないのではないかろうか。

四代胤治は明瞭である。彼は鎌倉本興寺の永禄二年（1559）銘棟札を初見として、永禄初めから天正五年（1558～1577）頃まで最も多事多難のなか、周囲の関東諸将と渡り合って土氣酒井領を守り抜いた人物であり、多くの文書にその存在を確認できる。そして、重要な点はその居城が明らかにこの土氣域であったことである。

永祿八年（1565）二月、胤治は土氣城で北条氏政軍を迎撃ったが、その様子は越後の上杉輝虎（後の謙信）の老臣河田長親に宛てた書状によって詳細に知ることができる。それによれば、攻城軍の主力は臼井衆つまり原氏率いる下総勢と同族の東金酒井軍であり、宿城、金谷口また善生寺口の三か所で戦闘を交えている。この三か所とはそれぞれ現在の土気町宿、大網白里町金谷、善勝寺東側坂下（4. 城の構造参照）に比定され、都合三方向から攻撃を受けたことになる。「度々得勝利」たとはいいうものの、胤治は優勢な攻城軍の前に籠城を余儀なくされたが、

二代...酒井定治

左衛門佐

三代・酒井玄治

(左衛門次郎)

東二代、三代については下記の文献によったが、若干の校訂を加えた。

「東金市話」「土気城主酒井氏系譜」
「土気古城再興伝来記」「酒井氏代々。井
びに治号の事。」

四代…酒井麗治 宮途名中務丞
(中書)

(中音)

酒井藩圖書館
— 二 —
旧冬以北村内記助、當國之様躰申候處、御想切ニ御傳
露役入存候、仍去十二年春氏政當城へ被取候狀、於祐城、白井平宇智
衆、原弥太郎・渡辺孫八郎・大綱半九郎・大戻藤太郎
・始木五十余年人封替候、同十三、金谷口名左衛門尉為手向指揮候間、是日、左衛門次郎人衆召遣指向軍一戰、
河崎新左衛門尉・市藤弥八郎・草野・宮田某、外宗者共
百余人討捕候、同日於善生寺口も切而出、十余人打候、
於度々得勝利候、可御心易候、—— 中略
—— 恐々謹宣、

〔新潟県史〕史料編5 中世三

▲なお、房総叢書をはじめとして引用されている「河田文書」は「大網半九郎」が「大畠半九郎」となっている。前者が正しいと思われる。

同年三月に氏政は下総関宿城を攻めているので、ことなきを得たようである。この戦闘と遺構との対応については同様、4. 城の構造を参照されたい。

さて、この土氣城を巡る戦闘がなぜ起きたかについて若干の説明をしたい。酒井氏は前掲文書に「我等事者、年来氏康・氏政前無二ニ走廻」とあるように、もともとは北条氏に属していた、というよりも千葉氏の重臣原氏と行動をともにしていたのである。たとえば、『千学集』天文十九年(1550)の項に、「原式部大夫胤清の一門、家風皆々馬太刀上げ申す也。高城、両酒井」とある通りである。それがなぜ反北条になったのか、「去年国府台合戦之刻、不忠之仁被引出」れた結果というのは実は胤治の口実に過ぎないだろう。越後上杉氏と結んだ房州里見氏の勢力はすでに上総におよび、この当時上総の中小勢力はその去就に揺れていた。直接その脅威にさらされていた土氣酒井氏が里見氏についても何の不思議はない。東金酒井氏については約4年前(永禄四年)と推測される『関東幕注文』に名を連ねている(ただし上杉軍に参陣したかどうかは不明である)。同族でありながらそれぞれ敵対する勢力に属する例は他にもままられ、驚くほどではないが、これも戦国の身の処し方といえよう。

それはともかく、以後の約十年間は里見というより反北条の立場にあった。これは土氣酒井氏にとってむしろ好都合であったろう。というのは南は長南武田氏また里見氏の勢力圏(諸書にこの間本納城攻略の事件を記しているが、本納はそれ以前から酒井氏の領内にあった)にあり、北の下総に向けて勢力を拡大する機会を



第12図 永禄七年国府台合戦前の房總



字入ノキテから見た宿城方面

▲永禄七年、宿城に押し寄せた氏政軍は臼井衆とはいっても、討ち取られた者の氏名からして、村田川中へ下流域つまり、小弓原氏の軍勢であったことがわかる。昨日までともに戦ってきた友軍と戦闘を交えた訳であり、戦国の非情さが偲ばれる。

得たためである。永禄九年（1566）の上杉謙信による下総臼井城攻撃（このとき胤治は攻城戦に参加する）、同十年の三船台合戦の勝利、同十一年の武田信玄の駿河侵入、及び、里見氏の下総侵攻と、周囲の状況は酒井氏に有利に展開した。東金酒井氏はこの間にまた土氣酒井氏と同心している。元亀二年（1571）正木時茂朱印状には「先年酒井左衛門尉ニ椎崎領相渡刻」とある（文献17、ただし要検討か）。

しかしそれも長くは続かなかった。元亀二年に武田・北条の講和が成立し、その後天正二年（1574）には里見義堯が死に、また、同年反北条の拠点であった篠田氏の関宿城が落ちるおよび、同三年には本格的に北条氏は下総および上総に侵入した。「土氣・東金・本納被押詰、郷村無残所」、「土氣・東金両地郷村毎日打散候、諸軍ニ申付、敵之兵糧を刈取」等の行動はこの当時の常套手段であったが、土氣城をめぐって戦闘が行われたかどうかはわからない。

（天正三年）六月廿二日付村上民部太輔宛足利義氏書状には、「十六向土氣及行、酒井左衛門次郎（康治）者六十餘人打捕候由」とあるが、この戦闘はどこで行われたのだろうか。

ここにいたって（天正四年）酒井氏はついに北条氏に屈した。天正五年、里見氏は越後の上杉氏に宛てて「両酒井モ去年一味候」と酒井氏の離反を報じている。近世の書にはこの天正五年に家督相続また胤治が没したこと記しているが、この前後であったことは確かである。

五代康治は初め左衛門次郎後に伯耆守を称した。前掲「本興寺棟札銘」には胤治の後に「嫡子小太郎政茂」とあるが、あるいは胤治の二男でもあったろうか。永禄の初めより父に従い出



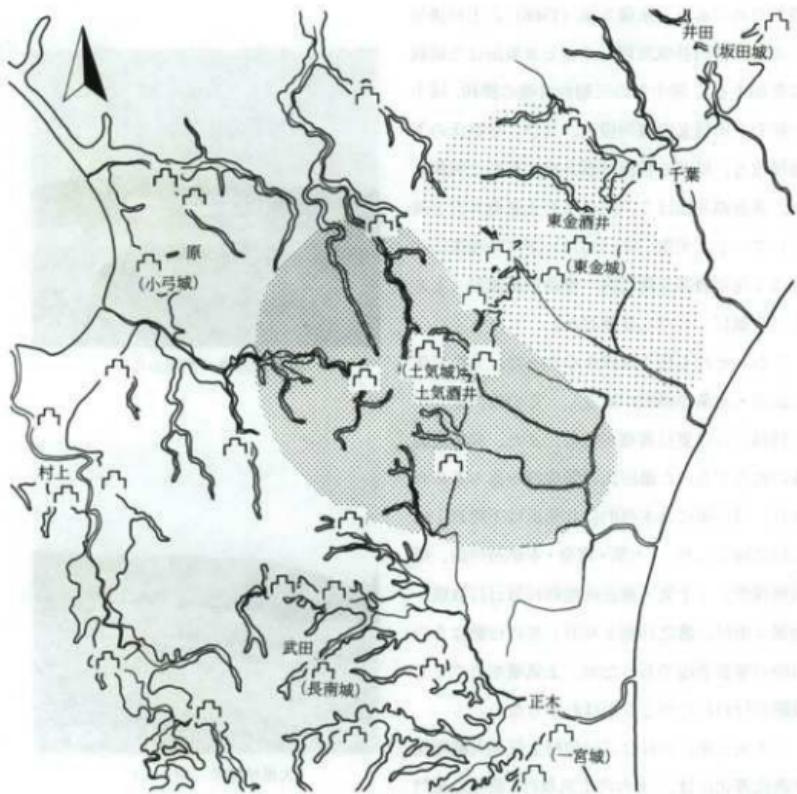
本納城遠景（東南から）



大椎城遠景（南から）

▲大椎城は発達した繩張と遺存度のよさから城郭研究者に注目されてきたが、土氣域の南北を押える重要拠点として16世紀後半に築城されたものであろう。

五代…酒井康治 受領名伯耆守
(左衛門次郎)



第13図 天正期の上総

陣し、天正四年以降は北条氏の対佐竹・里見の先兵として各地を転戦した。酒井氏にとって選択の余地はなかったが、里見氏の最前線は長南武田氏また万喜土岐氏にあり、かってのようないその去就に苦慮することもなくなったといってよい。しかしそのことは同時に北条氏と運命をともにすることであり、はからずもその時期はまもなくやってきたのである。

天正十四年(1586)、豊臣秀吉が北条氏ほか諸大名に対して命じた私戰禁止令いわゆる「惣無事令」に対して判断を誤った北条氏は、真田氏の沼田領をめぐる紛争から同十八年(1590)直接秀吉軍の来攻を受けることとなった。北条氏領国内の諸将はすべて小田原に籠城したが、康治もまたしきりである。この間の動きは同じく小田原にあった東金酒井氏(政辰)が地元に送った一連の書状によって類推することができるが、城についての記載がみられないのは残念である。なぜなら、秀吉来攻を前に各地の城郭普請が急がれ、実際にそのときのものと思われる遺構が現存するからである。土氣城の現存遺構もこの前後の大改修の産物と考えられるが、こ

の点についいては最後にふれることとする。

小田原落城後、康治は旧領中に寓居したと伝えられ、慶長十三年に没した。北条氏の旧領は徳川氏に与えられたが、家康家臣団が土氣城に入城・拠点とすることはなかったようである（これは東金城と大いに異なる点である）。その理由として、遠山成一氏は「根小屋にあたる金谷の集落からの比高が八十mに及ぶ土氣城の要害性は近世城郭としての展開を妨げる要因となった。金谷は谷の一番奥に位置し、発展性が見込めなかつた点もその一つ」と指摘する（遠山 1989）が、確かにそのような事情はあったろう。

さて、以上は記録からみた酒井氏とその居城である土氣城の歴史であるが、これに今回の測量の成果また過去の発掘調査や周辺の踏査、出土遺物等の成果を重ね合わせてみよう。

すでに実測図を一見してわかる通り、土氣城は戦国城郭としては完成された構造を有し、それがどうみても16世紀後半の所産であることは疑い得ない。そして今回の測量成果も事実その予想を裏づける結果となった。とりわけ、字見土堀にみられるような谷をはさんだ外郭部の存在は、武藏鉢形城、同岩槻城等（本県では本佐倉城ほか）で類似する遺構が現存し、いずれも天正年間に「大普請」を行い、「外曲輪」・「大構」（岩槻城）等の名称も文書中に認められる。現存する堀の幅や深さまたそのあり方も加味すると、現在の遺構が秀吉来攻前の天正後半代の普請による可能性大であろう。ではそれ以前の城はどうだったか。この点については過去の発掘調査が参考になる。

土氣城の調査は過去に4回行われている。二の曲輪で検出された古い堀、土壤墓群、焼土、



土氣城下南玉から見た土氣城



字見土堀の井戸沢曲輪（虎口付近）

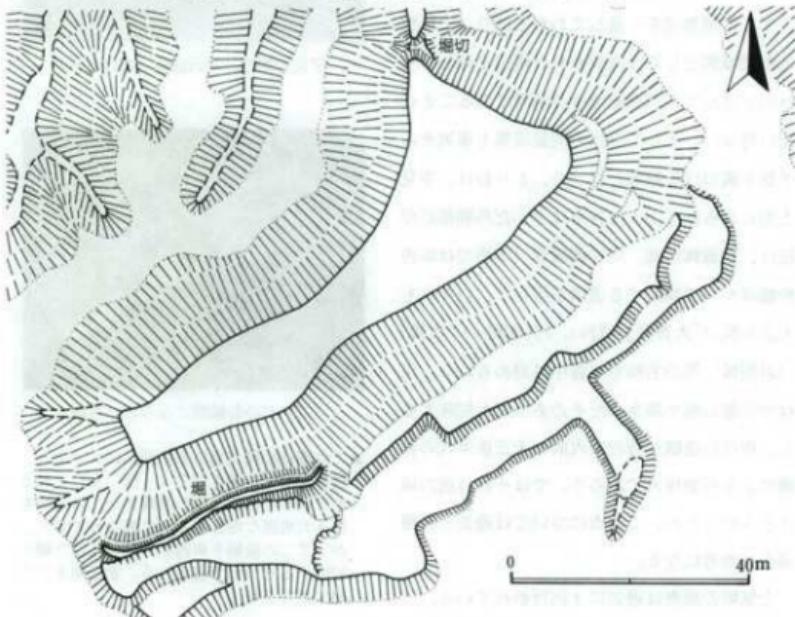


二～三の曲輪間にみられる古堀

▲この堀は絵図（鳩川家絵図）に二ノホリ、長さ参拾間、深さ三丈（一部二丈）と記されているもので、二の曲輪また三の曲輪を廻る大規模な堀と明らかに異なっており、かつて二の曲輪を東西に分割していた堀と対応するものと予測される。永禄期までの堀であろうか。

また、三の曲輪における厚い盛土下の遺構の存在は明らかに改築前の状況を示している。すなわち、旧状は比較的起伏に富んだ台地で、その一角には基壇も形成されていたことになる。これらは、実城また絵図に見える御蔵場の地の西側が後に城内に取り込まれた結果とみることもできるが、井戸沢から二の曲輪の真ん中を東西に分断するようにはしる埋没堀（規模は二の曲輪周囲の堀より劣る）との関係が不明なことや、実城周辺にまったく調査の手が入っていないことなど、いずれにしてもその段階的発展過程をおうことはむずかしい。ただし、過去数回の発掘調査による出土遺物（陶磁器）を概観する限りでは、瀬戸・美濃編年の大窯以前の遺物がほとんどみられない（大窯Ⅰ期後半以降が主流）ことから、本城の起源も1500年を下った段階としてよいだろうか。そうだとするとすでに指摘した酒井氏の歴史と合致することとなる。

周辺の城の調査結果はどうだろうか。限定調査の城を出ない大網城はともかく、土氣駅南側の再開発に伴って発掘調査が行われた大谷城、御堂崎城はともに16世紀代の城跡であることが明らかになった。とりわけ、大谷城は普請途上で放棄されたまれな事例で、その位置・構造等を勘案すると酒井氏にとって多事多難の永禄七年から天正四年の間に築かれた可能性が高い。御堂崎城は帰属がはっきりしないが、これも戦時に取り立てられた城の一つで、やはり同じ時期の所産であろう。両城とともに事前の踏査によって新たに発見された城で、土氣城の南西防御線にこのような城郭が存在することは史実を裏付けるものといえようか。



第14図 御堂崎城（文献No32より作成）

7.まとめ

まず、土気城について過去の研究から明らかになっている事柄を列挙しよう。

- ①その城主は酒井氏であること。
- ②起源については諸説あるが、その廃城は天正十八年であること。
- ③城の遺構は台地上のみならず、大網方面の支尾根に広く分布すること。
- ④現存する遺構（繩張）は戦国最末期の可能性が高いこと。
- ⑤段階的に整備・拡張されていったこと。

次に、今回の報告の成果を列挙する。

- ①当然のことであるが、初めて全域の地形測量図が作成されたこと。
- ②出土遺物からみる限り、その存続年代はほぼ16世紀のうちに求められること。
- ③現存する遺構の一段階前の状況が類推できたこと。
- ④土気城およびその周辺の中世戦国期の景観が多少復元できること。

さてこれらの成果を総合的に勘案して現段階における土気城の相対的評価をしたい。

1. 遺構の残存度およびその歴史的価値

二の曲輪中央部およびその周辺の一部が建物や施設によって改変されているとはいえ、その規模を考慮すれば遺存度は良好である。とりわけ、二の曲輪および外郭部の堀と土塁は規模壮大で埋没・損傷も少ない。また、北から東側にかけての斜面の遺構群もほぼ旧状を保っている。上総へ下総（本県の範囲）で同時期・同クラスの根城でありなおかつ遺存度の良好な城といえば、井田氏の坂田城をあげうるが、坂田城が半島状台地における戦国末期的繩張であるとすれば、土気城は背後に広い台地を配するいわゆる崖端城における一つの戦国末期的繩張と要約できよう。

2. 史・資料との関係

酒井氏は約40点におよぶ戦国期文書・金石文等に登場し、本県中～北部では千葉、原、高城氏と並びその動向を語るうえで基本的な史料に恵まれている。とりわけ、永禄八年の土気城をめぐる戦闘は、城のどこでどのような戦闘が行われたかを知る格好の事例といえよう。また、数回におよぶ発掘調査によって出土した遺物（陶磁器）は限られた時間幅に収まるものであり、城郭の変遷を考えるうえでも貴重な事例といってよい。

3. 広域景観復元の可能性

土気城が中世でその使命を終えたことは近世的町場の発展を妨げたが、そのことは逆に中世末の宿の有様を今日に伝えることになったといってよい。種々の開発行為がこの土気本郷町の手前で止まっている現在、この点は強調してよいであろう。また、石塔の分布から類推できる周辺の中世村落との関係、およびここ10数年の間にわたった周辺の既調査済城跡との有機的関連など本城を中世景観のうえで語る環境はじょじょに整いつつある。

引用・参考文献

1. 旭市 『旭市史』第三巻 1975
2. 井上哲郎 「東金市東金城跡」 『千葉県中近世城跡研究調査報告書』第9集 千葉県文化財センター
3. 伊禮正雄 「兩總における中世城址についてー一つの感想ー」 『千葉県の歴史』15 1978
4. 大網白里町教育委員会 『わが町の石造文化財』 1990
5. 小川和博・石井純一 「御堂崎城跡」「土気南遺跡群Ⅰ」 1992 千葉市文化財調査協会
6. 小川正夫編 『土氣城跡』 1968
7. 小田原市 『小田原市史』史料編中世II小田原北条 1 1991
8. 勝山豊七編 『土氣古城再興伝来記』 1913
9. 神奈川県 『神奈川県史』資料編古代・中世(3下) 1979
10. 川名 登 『房總里見一族』 1983
11. 川名 登 「房總の戦国武将・酒井氏の史実と伝説」 『房總の郷土誌』第3号 1975
12. 黒田基樹 「新発見の小弓・臼井原氏関係文書について」 『千葉市いまむかし』No.4 1991
13. 黒田基樹・滝川恒昭 「藩中古文書」所収正木文書についてー房總里見・正木氏に関する新史料ー」 『千葉県の歴史』41 1991
14. 黒田基樹 「松田憲秀に関する一考察」 『中世房總』第6号 1992
15. 古河市 『古河市史』資料中世編 1981
16. 山武郡教育会編 『山武郡郷土誌』 1916
17. 山武町 『山武町史』史料集 近世編 1984
18. 重永卓爾 「天正十八年相州小田原合戦に関する若干の文書ー上総国鶴沢文書の紹介ー」 『南九州文化』第34号 1988
19. 宮倉健吉 『千葉市南部の歴史』 1986
20. 杉山博・下山治久編 『戦国遺文』後北条氏編第三巻 1991
21. 杉山博・下山治久編 『戦国遺文』後北条氏編第四巻 1992
22. 清水浦次郎 『山武郡の古城址』 1972
23. 下山治久 「後北条氏時代の新宿について」 『交通史研究』第10号 1983
24. 千野原靖方 『戦国大名里見氏』 1989
25. 千葉県 「九 土氣城址」 『史蹟名勝天然記念物調査』第二輯 1926
26. 千葉県 『千葉県史料』金石文編一 1974
27. 千葉県 『千葉県史料』中世篇 諸家文書 1962

28. 千葉県 『千葉県史料』中世篇 県外文書 1988
29. 千葉県 『千葉県史料』中世篇 本土寺過去帳 1982
30. 千葉県郷土資料刊行会 「土気城雙発記」、「南總酒井伝記」、「土氣東金岡酒井記」、「土氣古城再興伝来記」 「改訂房總叢書第四卷」史伝(二) 1972
31. 千葉市 『千葉市史』史料編6 1988
32. 千葉市土気地区遺跡調査会 『千葉市土気地区埋蔵文化財調査報告1』 1980
33. 東金市教育委員会 『東金史話』 1954
34. 東金市 『東金市史』史料編二 1978
35. 東金高校考古学クラブ編 「昭和43年度文化祭発表要旨」 1968
36. 遠山成一 「六、土気城跡」「千葉県歴史の道調査報告書 九」 千葉県教育委員会 1989
37. 新潟県 『新潟県史』史料編5 中世三 1984
38. 三島正之 「土気城」 「中世城郭事典」一 1969
39. 南足柄市 『南足柄市史』 「松田氏関係文書集」 1991
40. 山下亮介 『千葉市立山城跡』 1992 (財)千葉市文化財調査協会
41. 「酒井」「寛政重修諸家譜」卷第九百五十五
42. 「酒井」「断家譜」卷25 1969

なお、陶磁器の編年・年代観については次の文献を参考とした。

- ① 井上喜久男 「瀬戸・美濃陶器の近世への変容」『貿易陶磁研究』No.7 1987
- ② 井上喜久男 「尾張陶磁(1)-近世初期の瀬戸物生産-」『愛知県陶磁資料館研究紀要』9
1989
- ③ 小野正敏 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982
- ④ 北野隆亮 「15~16世紀の貿易陶磁器-1980年代の編年研究を中心として-」『貿易陶磁研究』No.10 1990
- ⑤ 藤沢良祐 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986

写 真 図 版

図版1

土気城跡周辺の航空写真

図版2



昭和43年時の土気城跡



土気城跡斜め航空写真（大網方面から）



大網城跡付近より見た土気城

図版 4



土氣城跡三の曲輪近景（南から）



御経塚近景（北側から）

市原市池和田城跡



池和田城跡の位置

1. 位置

池和田城跡は市原市池和田字城廻280-1他に所在する。

市原市中部は養老川に沿って河岸段丘が発達するが、とりわけ平蔵川の合流する鶴舞から牛久付近は三面の段丘面がみられる。城跡の所在する池和田字城廻の地はこのうちの低位段丘面に相当し、沖積面に向かって突出した丘陵地形をなす。

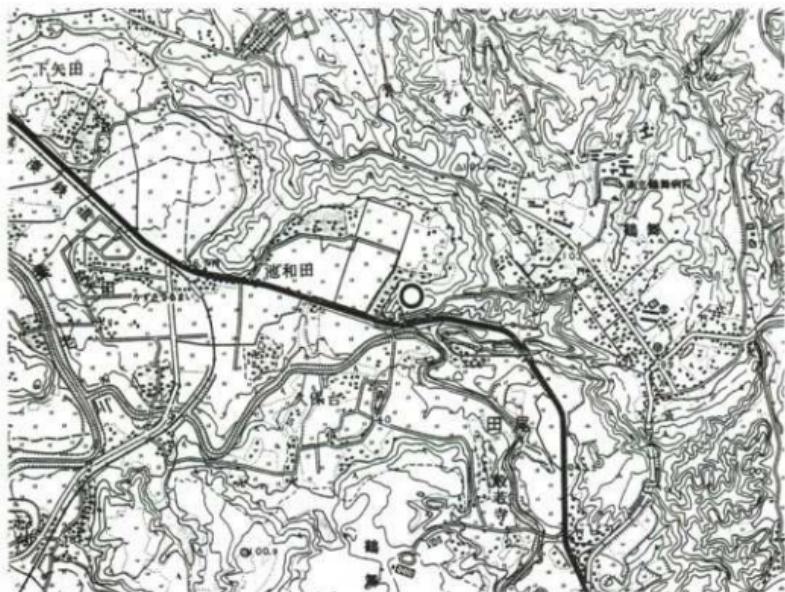
城跡の南側は平蔵川が曲流し、西から北側にかけてはメアンダー（曲流）の跡かと思われる地形がみられたが、現在は一面の広い水田地帯となっている。

地層は第三紀層の笠森層であり、斜面の方々で露頭が観察される。



池和田城跡遠景

▲西側の外沼方面から城跡を見る。かつてこのあたりは深い沼であった。



第15図 池和田城跡の位置 (○印) 国土地理院 1:25,000地形図 昭和53年時

2. 周辺の城跡と中世遺跡

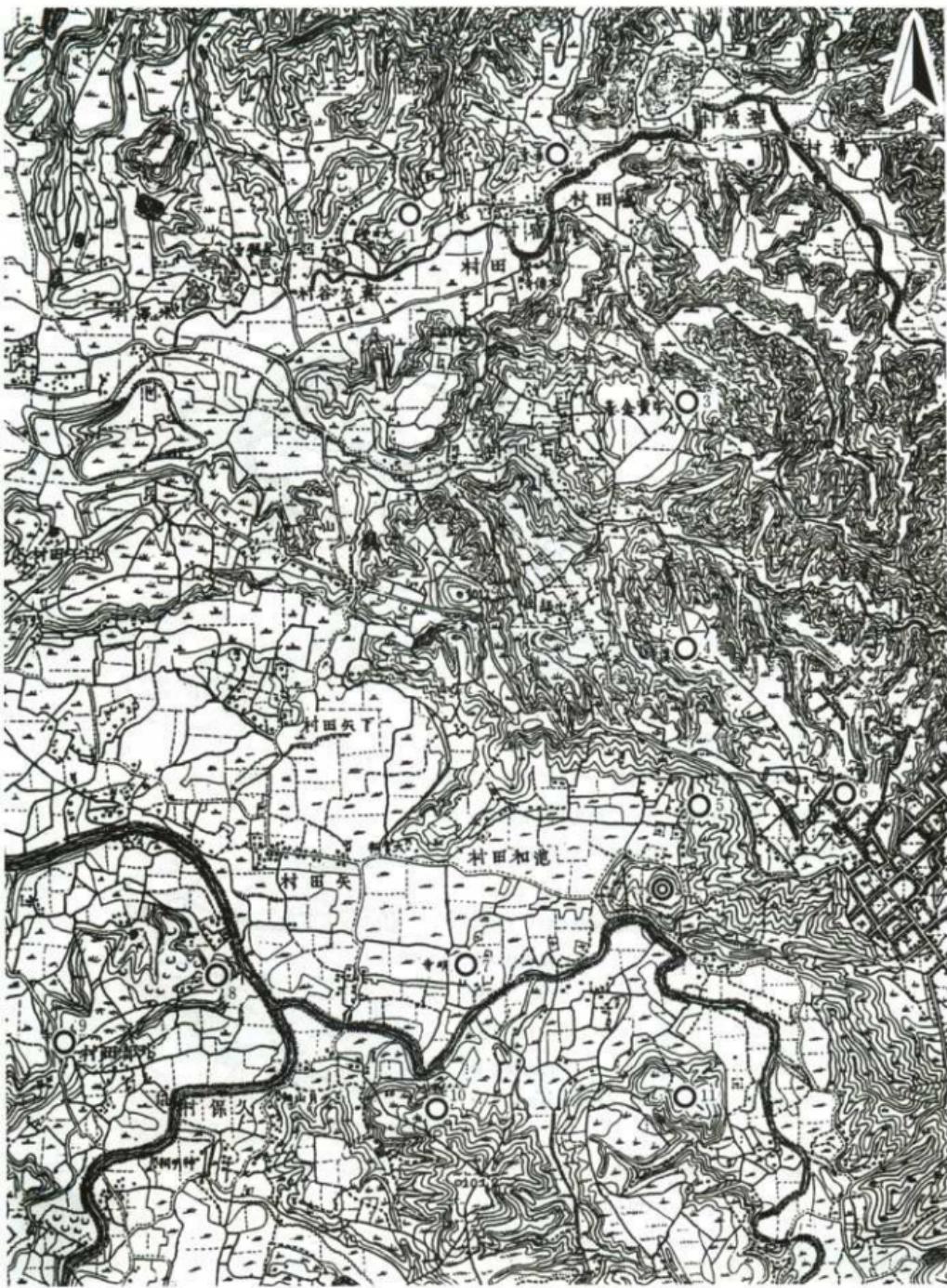
- 1 真ヶ谷城跡 字要害の地。16世紀前半の城であろうか。麓の大日堂に戦国期石塔あり。
- 2 長榮寺 多賀氏関連の縁起がみられる。
- 3 石川城跡 昭和57年測量・発掘調査。大規模な城跡ながら未完の様相を示す。出土遺物は近世中心で、遺構の状況と対応するものであろうか。
- 4 龍溪寺 多賀氏菩提寺と伝える。曹洞宗。
- 5 東光寺跡 光明寺旧末寺。「多賀藏人助」の胎内墨書銘を有する仏像を蔵した。
- 6 鶴舞城跡 明治元年、井上氏が遠江国浜松より移封後築城開始したが、同四年廃藩置県をむかえる。
- 7 光明寺 天台宗。境内に戦国期石塔あり。
- 8 雀ヶ崎城跡 御園生館跡として把握されているが、戦国期城郭遺構は台地先端部にほぼ限定されるため、字名をとって雀ヶ崎城跡とするのが妥当。遺構の状況から池和田城と同時期に位置付けられるのは確実。
- 9 坂中薬師堂 永禄年間、湯浅氏寄進の鰐口現存。
- 10 林祥寺 江子田多賀氏の菩提寺。曹洞宗。
- 11 陣馬台砦 永禄年間、北条氏の陣城と伝えるが、真偽不明。

3. 調査の概要

まず、調査の方法および目的については、土気城と重複することが多いので割愛したい。池和田城の大きな特徴は要害性に富む丘陵に地形のなりに合わせて曲輪どりをすることがあるが、結果として小規模な平坦面が連続するわかりにくい構造となっている。加えてその麓に集落が立地するためか、畠地としての後世の改変を含むさまざまな人為的働きかけが考慮される。このような城はいかに忠実に地形をとらえてもそれはみかけ上の操作に過ぎないという一面がある。それゆえここでは現地の踏査・聞き込みに重点をおき、できるだけ旧状を把握することにつとめた。

4. 城の構造

池和田城跡については、落合忠一氏等による概要紹介を除いては有名なわりにその実態が不明瞭であった。しかし、近年、『日本城郭大系』また『市原市史』に鈴木英啓氏による概念図が公表（後者がより詳細）され、ようやく遺構の概略がつかめるようになった。しかし、地形条件（瘠せ尾根状丘陵地）に加えて後世の改変（畠地化）が行われたためか、城の全体像を的確にとらえることは困難である。それゆえ、以下各遺構の記載は多分に推測によることをまずことわっておきたい。なお、各遺構の呼称については各々の項で解説したい。



第一軍管地方迅速測図 (1 : 20,000) 明治15年測量

第16図 周辺の城跡と中世道路 (○印池和田城跡)



第17図 池和田城の縄張 (1:4,000) ■市原市基本図に測量成果に基づいた縄張図を載せたもの

実城 城跡内で最も高い（標高約70m）天神社の所在する中心的な曲輪を中世的呼称でよんだ。面積約4,000m²、略長方形の曲輪である。

東側主尾根続きは二段の腰曲輪を経て大規模な堀（堀切）を設ける一方、南西支尾根続きは片側に土橋をつけ堀切で断ち切っている。南側は小規模な削平地が部分的にみられるものの、総じて急崖である。北側は一（二）段の腰曲輪が取り巻いており、その先は大規模な堀がめぐっている。

曲輪の北西、天神社の周囲には土壘状の高まりがみられるが、その状況からして神社に伴う可能性がある。なおその先の一段低い小さな曲



第18図 実城 (1:2,000)

輪は城の遺構とみるべきである。

虎口は北東で、現在の道沿いにそれぞれ二の曲輪また三の曲輪にいたったと思われる。

二の曲輪 実城北西の平坦面を指し、実城またその一角から派生する支尾根によって囲まれた谷部に相当する。面積約3,000m²(南側谷地を含めると8,000m²)である。

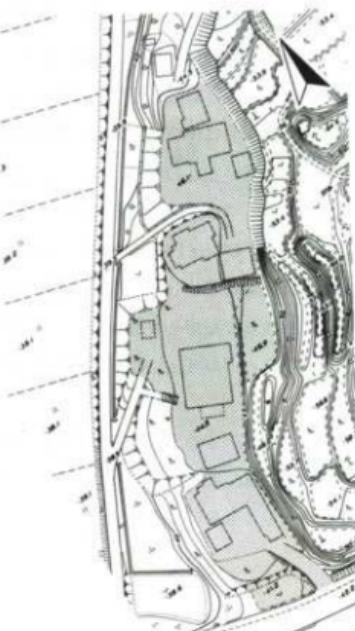
東側から北側は、土壘状の尾根(一部途切れる)を隔てて大規模な堀が東側から続くが、ここでは単なる腰曲輪状の段差となっている。西南は一段低い曲輪状の平場と段差をもって接する。西南尾根の頂部(八坂神社を祀る、地元では山王様と呼称)は人工的削平の跡が明瞭で、その位置から櫓の存在も想定されよう。

一連のものとしてよいかどうか問題もあるが、二の曲輪南西平場についてもここでふれておく。ここは「ユーゲ」つまり要害と呼ばれており、南側が急崖をなすほかは谷地をなしていない。現在、その際を崖沿いに道がはしっているが、これは後世の所産で、もちろん国道297号も存在しない。なお、西側を画す自然の丘陵はその西側肩口から削平して、堀(西側のみ)または腰曲輪(南西部と東側)をめぐらすが、この堀は実城北側と比較して規模こそ劣るもの明瞭である。

三の曲輪 三の曲輪は二の曲輪西側中段の平場を指す。外曲輪といつてもよいだろう。しかし、本曲輪は後に東側腰曲輪を大きく削って均したことが明らかであり、実際は単なる腰曲輪とみられないこともない。一応、まとまった平坦面が見られることから曲輪としたが、その西側はかつての沼地にあたる点も考慮した。面積は現状で約6,000m²を測るが、旧状はおよそ



第19図 二の曲輪 (1 : 2,000)



第20図 三の曲輪 (1 : 2,000)

4,000m²ほどと推測される。

宿 西南川沿いの字古宿の地を宿城の可能性があるとみてここで扱った。現在は耕地整理がなされたため旧状はうかがえないが、旧土地区割また航空写真等により、そこが島状の微高地となっていたことは明らかである。また、耕地整理時には遺物も出土したと聞く。面積約30,000m²を測る。

その他の遺構についてここで記す。虎口は必ずしも明瞭とはいえないが、国道297号と田尾へ向かう分岐点は宿・光明寺方面また岩井戸方面との出入口にあたりここには木戸を含む何らかの施設が存在したことであろう。また、内和田方面には二の曲輪北側下、谷方面には東側を画する堀切（堀）から道路を隔てて図示したようなルートを通ったと予想される。

最後に一つ付け加えると、本城は尾根続きの鶴舞台地より丁度40mも低く、俯瞰される位置にあり、この方面は戦闘に際し弱点となる。事実、大堀切は南北に伸び、堀または平場と形を変えてめぐってはいるものの、どういうわけか、丁度尾根のネック部分で比高差に乏しくなる。

このような、字谷・内和田方面への防御施設の貧弱さは理解に苦しむが、同時に鶴舞との尾根続きにどうして堀切を多用しなかったのか、これは該期の近辺の城と比較した場合謎に近いものがある。

いずれにせよ、このような疑問もそれは現状での判断である。頭書に力説したように、不確定要素があることをここで再度ことわっておきたい。



字古宿遠景



大堀（切）近景



鶴舞台地より見た池和田城

6. 城の歴史

池和田城は通説では多賀氏の居城ということになっており、国府台後役の余勢をかった北条軍による永禄七年（1564）の池和田城攻撃は折にふれ紹介されている。

しかし、従来池和田城について語られる出来事のほとんどが軍記物からの引用であり、その実態となると驚くほどにわかっていないのが実状である。しかしこのようなことは池和田のみならず、程度の差こそあれ養老川流域の多くの城に共通する現象といってよい。その原因が両武田（長南、真里谷）、正木等周辺勢力の間にあってつねにその影響下におかれていた当地域の事情によることは推測に難くない。以下、限られた情報からこの城の歴史を垣間みることしたい。

多賀氏といえばまず近江源氏佐々木氏の族多賀氏をあげうるが、事実その子孫と伝える長柄町船木の「多賀氏系図」ではこの佐々木氏の出自となっている。その一方、常陸多賀荘あるいは下総多賀の出身とみる考え方もある（『市原市史』）。『系図纂要』には、武田氏族として、別系統の多賀氏をあげている。ここではさらに言及を避け諸説をあげておくに留めたい。

多賀氏の初見史料かと思われるものは大永元年（1521）の多賀氏寄進状であるが、残念なことにこの文書は現在所在不明（石川龍溪寺住職談）となっている。ただし、『市原郡誌』でわざわざことわっているところをみると、実見したものであろうか。

多賀氏の名はみえないが、永禄元年（1558）に長南武田の当主豊信の下した制札には「当地長南并池和田之者」とある。池和田軍が長南武田軍と行動をともにしたこと、すなわち多賀氏もこの時点では武田氏に属していたかあるいはその同盟的立場にあったと思われる。當時、長南武田氏は里見氏に属していたようであるが、このことは結果として多賀氏には凶とでたようである。

永禄七年（1564）正月初め、国府台後役に勝

*「信繁一信俊一成俊一定俊」
初代…（多賀越後守）



石川龍溪寺

▲多賀氏菩提寺と伝え、本堂には近世の所産ながら多賀氏の位牌を安置する。

利した北条軍はその後上総に侵入、椎津城を落とした後（軍記物には守将木曾某は城を棄て敗走する）とある）、この池和田城に迫ったようである。那須氏に宛てた二月十八日付足利義氏書状写には、「仍池和田其外仁三ヶ城落著」とある。池和田の落城はこれからすれば、1月～2月にかけての間ということになる。

ところで、北条氏政の奉行人山角氏は、永禄七年七月二十七日に上総高根郷に禁制を出している。この高根郷を現長生村高根とみるか、あるいは市原市の上高根・中高根とみるかによつて事情は少し異なる。前者とみれば北条氏に組みした正木時忠の反乱（永禄七年中に時忠は高根に近い一宮城を攻めている）との関係が想定されるし、逆に後者とみれば池和田城を含めた上総遠征との関連が予想される。もし後者をとれば池和田合戦も七月の後半を前後する時期ということになり、前掲文書と合致しなくなる。

ともあれ、ここでは永禄七年中の池和田合戦をまず認めたうえで先に進むこととする。

池和田合戦は『小田原北条記』を始めとした軍記物にしばしば登場する。その守将は多賀藏人、（右）兵衛尉（大夫）兄弟であること、西北また南は深田で東は高山を控えその峰続きを掘り切った要害の地であること、援軍の将として里見氏より正木氏が派遣されたこと等は共通する事項といえよう。ただし、多賀兄弟が捕つて討ち死にしたかどうかはまちまちで、合戦の起こった年も『関八州古戦録』などではわざわざ天文十三年や永禄八年ではなく永禄六年であることわっている。

確かに、多賀藏人は実在の人物であり、「西門院文書」にみえる多賀藏人佐信家なる人物は事

*戦後、北条軍は長駆上総の諸城を攻略したのではなく、海路西上総から侵入したとする説が有力である。千野原靖方「戦国大名里見氏」他

*高根郷についてはこの他に年末詳ながら天正五年（あるいは永禄八年）かと推測される北条綱成判物写に登場する。「集古文書五十二」「戦国遺文」後北条氏編第二卷



実城（本丸）の現状



二の曲輪西側の空堀

二代…多賀信家
藏人佐（助）

実この池和田の多賀氏であろう。この文書は西門院との関係からおそらく永禄期以降と思われ、二代に比定した根拠もここにある。加えて地元には弘治三年（1557）の銘を有する仏像に「当且那多賀藏人助」とある。多賀氏が代々藏人を称したかどうかは明らかでないが、永禄七年前後に多賀藏人がこの池和田城に居たことは認めてもよいであろう。

その後、池和田城がどうなったかはわからないが、永禄十年（1567）の三船台合戦後は里見氏の勢力圏内に入ったことは確かであり、事実まもなく多賀氏も復帰したようである。

戦国末期の上総は北条、里見（正木）両勢力の草刈り場的様相を呈したが、そのなかにあって、長南武田氏は着実に勢力を伸長させていった。本納、一宮を除く長生郡全域から市原市北東から中部また一部は君津郡までおよんでいたが、池和田はその西の要とでもいうべき位置にあった。

天正三年（1575）、北条氏は本格的に房総経略に乗り出し、上総の東西から侵攻を開始したが、同四年秋には腰を据えて諸城を攻略した。

しかし、今回は（恐らくその前から）利をもって誘われた結果、早々と北条氏の軍門に下つたようである。天正五年の九月と推定される北条氏規書状には、内房方面での優勢な戦況にふれた後、「長南・池和田」つまり武田氏を味方にしたのでこの度の里見氏との戦闘はまもなく我が軍の勝利に終わるとある。そして、事実事態はそのように推移した。

北条氏政宛十月九日付足利義氏書状には、「此度上総表調儀、如被存旨之而、武田兵部太輔致参陣由」とあることから、当然多賀氏もそ

* 多賀信家書状 『高野山文書』第四卷

* 池和田城宿に隣接する光明寺藏薬師三尊像中尊光背頭光部裏面墨書銘〔市原市内仏像彫刻所在調査報告書－南部編－〕。なお、この仏像はもと城跡北西の字向部田にあつた光明寺末寺東光寺のものという。



第21図 長南武田氏の勢力範囲

▲弘治から永禄年間にかけて、すでに多賀氏は武田氏と行動をともにしていたが、天正年間には図に見るような領国を上総中央部に形成したものと思われる。

* 九月晦日付山本太郎左衛門尉宛北条氏規書状（黒田基樹「越前史料」所収山本文書について 『駒沢大学史学論集』第21号）

* 「国会本喜連川文書」『古河市史』資料 中世編

れに徹ったであろう。『房総治乱記』には、武田兵部小輔信宗家人多賀六郎左衛門同勘解由左衛門との記載があるが、確かにそのような関係（宿老といつてもよい）はあったろう。

同じくこの年と思われる、結城晴朝に宛てた臘月（十一月）九日付足利義氏書状には、「房総調儀、去秋以来諸軍雖令張陣候、池和田之地今指兼候、至于来春者、早々自身参陣」とあって、その先陣が池和田付近にあったことを知ることができる。里見義弘がやむなく北条氏と和睦したのはこの年の内であった。

信家の没年は不明ながら、長柄町多賀家藏多賀藏人の位牌には、元亀三壬申六月十六日池和田とある。彼が池和田合戦後生きのびて、当主の地位を保った可能性もある。

天正五年（1577）の「相房一和」後は上総も安定したかにみえたが、天正六年、同八年の里見氏内また小田喜正木氏との内訌もあって、池和田と接する市原南部の状況も一時緊迫したようである。それは、長南武田氏と小田喜正木氏が姻戚関係にあって、その動向が懸念されたことによるが、北条氏による一元支配の下、武田氏が最早里見氏の内紛にすぎない出来事に介入することはありえない。高滝以南の市域にはこの事件に関連して出されたと思われる安堵状をはじめとする里見義頼文書が多数存在する。恐らくそれ以前は小田喜正木氏が領していた結果であろう。すなわち、高滝から平蔵を結ぶ線より以北が多賀氏の勢力圏ということになるが、市原北部の状況からして、旧内田村、鶴舞町、牛久町、同高滝村の一部ということになろう。

信家の後の当主は不明ながら、いずれにしても彼が天正十八年までその地位にあったとは考え

*「河田駒雄氏所藏文書」「古河市史」 資料
中世編



池和田光明寺近景



東光寺跡遠景（中央斜面中腹）

*島田川流域（内田）には伝承が遺存する。
（『長栄寺縁起』『市原郡誌』、『享保十一年
内田村繪図裏書き』 野口博芳氏ご教示）

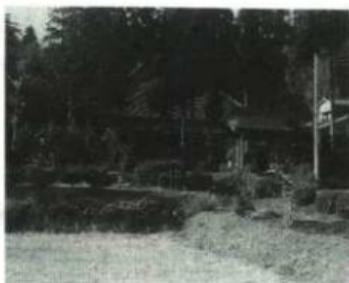
三代…（多賀信繁）
彦七郎

られない。あるいは、対岸に位置する田尾の林祥寺所蔵史料（近世）にみえる多賀彦七郎信繁なる人物が該当しようか。

下って、天正十八年（1590）のいわゆる小田原征伐に際して北条勢力を書き上げた「北条氏直分国惣人數注文」ほかによれば、池和田城は長南、勝見とともに武田氏抱えの城として挙げられており、そのしめる位置を知ることができ

る。
天正十八年以後の状況は不明である。一説に多賀藏人の子内膳は永禄七年の池和田合戦の後「同國長柄郡舟木村の内の八反目」という所に逃れたという（『土氣古城再興伝来記』）。これが現在の長柄多賀家である。このほかに池和田城から約2km北西の江子田には多賀姓（近世には江子田とも称した）の家がまとまって存在し、いずれも林祥寺を菩提寺とする。

*筆者実見、なお、前掲「長栄寺縁起」には池和田城主多賀某子息彦七郎とみえる。

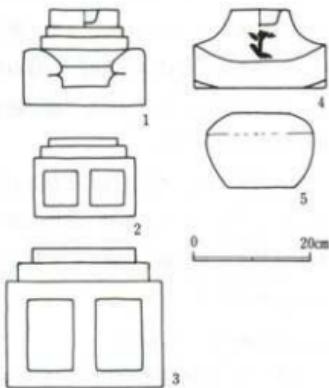


田尾林祥寺近景

*長柄町船木649 多賀大郎家



光明寺中世石塔現況



第22図 光明寺の石塔（1/10）

7.まとめ

池和田城については、多くの軍記物に池和田合戦が登場することから、一般によく知られている。しかしその反面、多賀氏また池和田城の実像はほとんどわかっていないのである。その年代にしても、永禄七年（1564）という確証はなく、何月かもわからない。わずかに、概念図（鈴木 1980、1986）の公表、また、直接多賀氏の歴史を扱った一、二の文献（大島 1960、野口 1986）をあげるにすぎない。

このような事例は何も多賀氏に限ったことではなく、多かれ少なかれ房総の中小勢力に共通することであり、とりたてて強調することではないかもしれない。また、彼らの拠った城は規模も小さく、加えて上総南部の場合はその構造も地形条件のゆえか単純なものが多い。いわば、多賀氏も池和田城も当地の一般的な傾向にそっているのである。

しかし、だからといって短絡な相対的評価をこの城に与えることは適当であろうか。戦国大名は中小土豪をいかに多く服属させるかで勝負が決まる。その土地と深く結びついた土豪層のうえに彼らがたっている限り、両者の関係を正しく見据えたうえで評価されるべきであろう。

そのためには、個々の事例についての正しい情報を多角的に入手する必要があり、この報告もまさしくその一つと考える。

1. 遺構の残存度およびその歴史的価値

城跡は一部民家の敷地または道路敷となっているものの、現況は山林であり遺存良好である。ただし、平坦面がかつて畠となっていたことから多少の人为的な改変が明瞭であり、結果としてその構造は少しわかりにくいものとなっている。とはいえ、市原市内では遺存度の良い城の一つでもあり、また、焼土、焼米の出土は落城の記録と符号するところがある。このような城は一宮町一宮城の例が示すとおり遺構・遺物に恵まれる場合が多い。

いずれにせよ、その内容を正確に把握するには発掘調査の手段をとることが必要であろう。

2. 史・資料との関係

既述のように、多賀氏はわずかに1点の発給文書を除いては、仏像墨書銘に断片的にあらわれるのみであり、後世（近世以降）の記録に情報のほとんどを頼ってきた。新たな資料が発見される見通しは必ずしも明るくないが、今回のような基礎的作業を積み重ねることが必要であろう。

3. 広域景観復元の可能性

中世前期の佐是郡池和田・矢田両地は「畠文書」によって、約200年間にわたる支配関係が明らかであり、また、後期には有名な鉄物師集団（矢田の鉄物師）の存在が確認できる。これに戦国末期の池和田城を加えれば、各々その時期と内容を異にするが、一地域としては、各時代ごとに特色ある中世史を継ぐことができよう。

引用・参考文献

1. 郡教育会 「市原郡誌」 1916
2. 市原市 「市原市史」資料集（中世編） 1980
3. 市原市 「市原市史」中巻 1986
4. 市教委 「市原市内仏像彫刻所在調査報告書－南部編－」 1993
5. 大島四郎 「南總池和田古城物語」 1960
6. 落合忠一 「池和田城と多賀藏人」 『南總郷土文化研究会誌』第5号 1966
7. 落合忠一 「市原市の城郭跡について」 『市原地方史研究』第3号 1967
8. 小幡重康 「市原市の寺院考」 『市原地方史研究』第14号 1986
9. 川戸 彰 「中世における矢田の鎧物師」 『市原地方史研究』第9号 1978
10. 鈴木英啓・須田 勉 「池和田城」他 『日本城郭大系』6 1980
11. 鈴木英啓 「石川城郭跡」 1984 市原市文化財センター
12. 柴田龍司 「市原地域」「千葉城郭研究」第1号 1989
13. 千葉県 「千葉県史料」金石文編一 1974
14. 野口博芳 「上総国佐是郡矢田郷具書案十二通「烟田文書」について」 『南總郷土文化研究会誌』第9号 1974
15. 野口博芳 「市原の合戦史－池和田城の攻防－」 『市原地方史研究』第14号 1986
16. この他に近世の軍記物として次の文献（主なもの）を参考とした。
『間八州古戦録』、『里見軍記』、『房總治乱記』、『北条五代記』、『土氣古城再興伝来記』



池和田城跡周辺の航空写真（1:13,000）昭和42年撮影、耕地整理前



「養老川古川跡分布図」(「市原市史別巻」)

池和田周辺

北條氏政上陸國淮ノ和田合宿有三士基名羅一
其は上陸國小河内庄池ノ和田城へ進軍、城主・家臣多喜種後守在居
トキ越後守春日野貞義・今金源・子孫・人右衛門守兄弟守・又守
ノ者・又・亡父・近ノ守・墨守・居守・居メ・ケ・ム・成・納・ノ時・重・兵・
衆・近・守・打・出・北・條・家・持・ノ・地・タ・御・守・レ・ア・根・木・木・植・
ス・ノ・山・南・方・相・接・ヘ・シ・テ・氏・政・一・萬・騎・軍・事・豆・井・下・山・東・境・置・ノ
港・ヨ・島・船・レ・マ・上・越・國・清・瀬・ト・海・ナ・取・レ・ナ・月・廿・日・武・級・大・物・見・出
ア・見・分・カ・ラ・ン・テ・通・ニ・西・毛・原・方・瀬・田・ヨ・ア・高・原・ヒ・御・ク・原・ノ・方
ノ・高・山・ヲ・カ・ド・リ・尾・根・ナ・派・切・ク・營・寺・ス・是・ヨ・始・ア・式・既・下・知・チ・如・入
夫・數・百・人・ケ・テ・フ・民・家・ツ・サ・ナ・作・農・耕・ノ・增・メ・草・ト・レ・山・上・ヨ・失・失・ナ・飛
テ・御・様・ナ・引・破・リ・次・態・ラ・メ・イ・去・ト・シ・モ・貴・免・府・ヘ・正・不・大・難・免・
加・勢・ノ・人・數・手・都・ア・防・サ・ク・(國・守・モ・多・タ・尋・ノ・用・象・フ・レ)

—以後略—

軍記物に見える池和田城周辺の地形

(「関八州古戦録」)



池和田城跡斜め航空写真（田尾方面から）



池和田城跡遠景（田尾方面から）



池和田城跡宍城土壘



池和田城跡遠景（外沼方面から）



1:2,000
附图1 土地利用地形示意图



市 原 市
池 和 田

1:2,000
付図2 池和田城跡地形測量図

報告書抄録

ふりがな	ちばけんちゅうきんせいじょうせきけんきゅうちょうきほうこくしょ
書名	千葉県中近世城跡研究調査報告書
副書名	土気城跡・池和田城跡測量調査報告書
巻次	第14集
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第256集
編著者名	小高春雄
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター TEL 0434-22-8811
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地の2
発行年	西暦 1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
土気城跡	千葉市緑区 土気町826 他	12201	109	35度 31分 41秒	140度 17分 42秒	1993.11.01～ 1993.12.28	217,200	国庫補助 事業による 測量調査
池和田城跡	市原市池和 田字城ヶ廻 280-1他	12219	066	35度 22分 44秒	140度 10分 44秒	1993.11.01～ 1993.12.28	93,800	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土気城跡	城跡	中世	曲輪、土塁、堀、堀切、虎口、腰曲輪	なし	上総の戦国大名土氣酒井氏の根城として有名。発達した繩張と、改築の状況また宿城の様相をある程度捉ええた。
池和田城跡	城跡	中世	曲輪、土塁、堀、堀切、虎口、腰曲輪	なし	長南武田氏の重臣多賀氏の根城の様相が明らかになつた。

千葉県文化財センター調査報告第256集
千葉県中近世城跡研究調査報告書 第14集
—土気城跡・池和田城跡測量調査報告—

平成6年3月30日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809番地の2
印 刷 株式会社 集 賛 舎
千葉市緑区古市場町474-265

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。